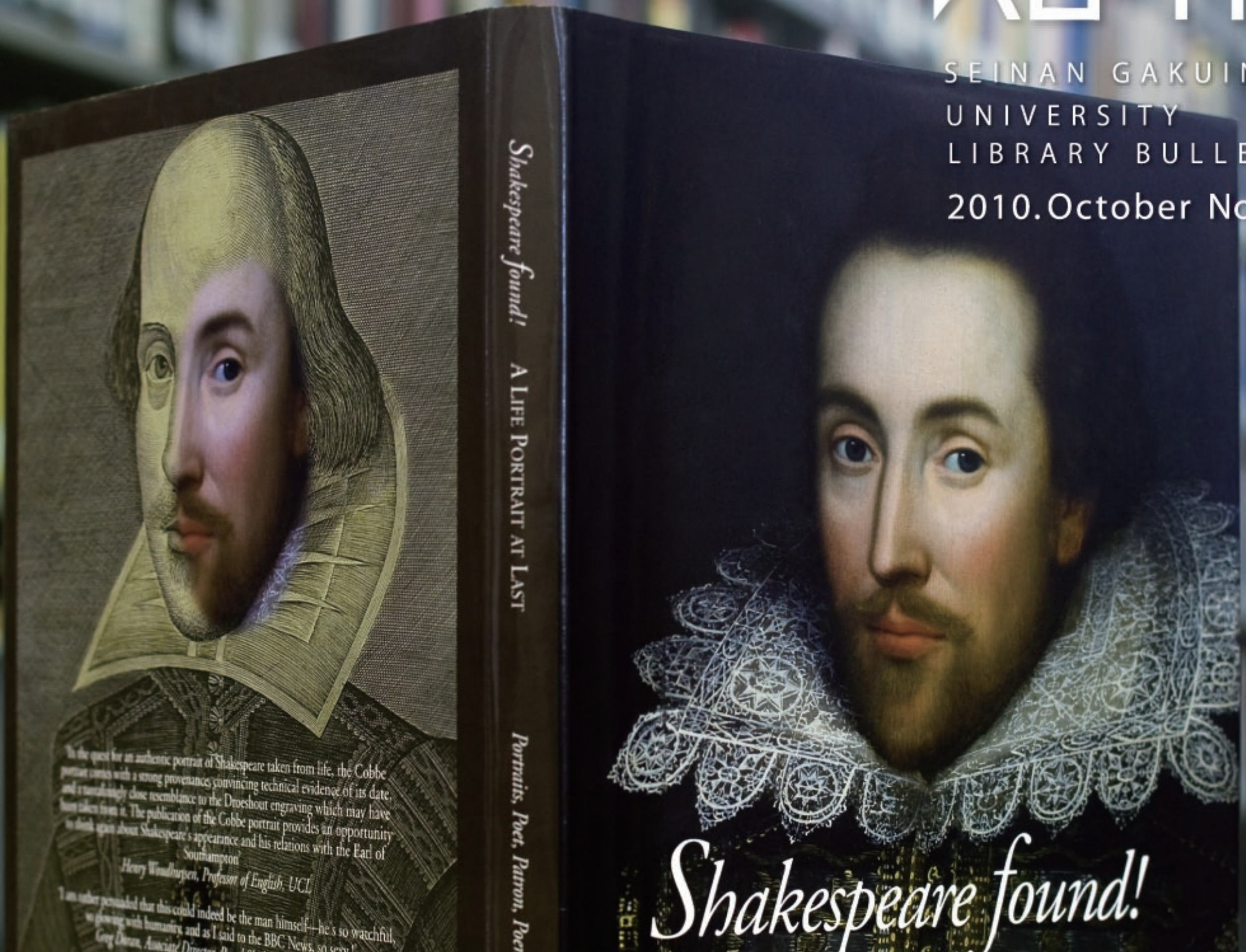
ISSN 1344-5642

図書館報

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

2010.October No.169



世界の図書館 イタリア半島編

1　「危機と自由」
図書館長　尾上 修悟

2　研究ノートから
Siebold『NIPPON』　国際文化学部 国際文化学科 教授　宮崎 克則
ブラウジングルーム
鉄道会社の歴史を辿る　商学部 商学科 准教授　福田 晴仁

3-4　世界の図書館 イタリア編
トリノ大学国立図書館　法学部 法律学科 教授　神宮 典夫
ローマ法王庁バチカン図書館　国際文化学部 国際文化学科 准教授　山田 順

5-6　使ってみようシリーズ(13)
ひと息入れてみよう!　図書情報課　小副川 明子

7　蔵書ギャラリー no.10
『シェイクスピア新発見:生前の肖像画』
文学部 英文学科 教授　古屋 靖二

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY

「危機と自由」

図書館長　尾上 修悟

この数十年間、世界は、いわゆる「新自由主義」思想で覆われてきた。それは今や、リバタリアニズム(自由至上主義)に進化した。この思想は、人々の抗し難い魅力を発揮し、あたかも現代文明の中核的価値となるかのように君臨した。新自由主義の横行により、規制は可能な限り撤廃され、市場的自由の領域はグローバル規模で開拓された。その先兵となった部門が金融であり、汎金融化が進行する。それにより世界の権力は金融に移行し、新たな支配階級が生み出された。このことは同時に、富の蓄積方法を変え、それをつうじて資本主義そのものの性質をも変化させた。(ハーヴェイ[3])その帰結は、グローバル金融危機の頻発であった。

この新しい自由主義思想の淵源は、周知のようにオーストリアの著名な経済学者F.A.ハイエクの考えに求められる。ハイエクは、自由とは強制がないこと、とみなす。(ハイエク[2])自由は、他人の恣意的意志からの独立を意味する。それゆえ、自由のための政策課題は、強制ないしその有害な影響を最小にすること、とされる。彼はそこで、自由を権力とする考えを徹底して排す。個人的自由を守るためには、人を強制するあらゆる権力を排除しなければならない。国家でさえ、その権力の行使は、私人による強制を防ぐ場合に限定される。このようなハイエク思想が表されると、それに同調するエピゴーネンが、米国を中心に続出した。中でも現代の経済学者を代表する1人であったM.フリードマンは、最も熱心なハイエキアンであった。彼は、自由社会を目指す上での経済の役割について、経済体制の自由が、政治的自由の実現に不可欠な手段になる、と捉える。(フリードマン[5])要するに、自由競争による資本主義体制こそが、すべての自由を保障し実現させる。彼はこのように主張した。

一方、自由論はこれまで、政治学者の間でも盛んに議論された最重要テーマの1つであった。その中で、イギリスの政治哲学者I.バーリンが、オックスフォード大学の就任講義で展開した2つの自由論は、今や古典となっている。バーリンは、自由の概念を2つに分けて論じる。(バーリン[4])1つは、消極的自由の観念で、それは、一個人がいかなる他人からも干渉されずに放任されている状態を指す。その際に強制は、他人の故意の干渉を意味する。もう1つは、積極的自由の観念で、それは、自分自身の主人でありたいという個人の側の願望を示す。そこでの私は、自身の意志行為の主体となる。彼は、自由概念をこのように分類した上で、政治的には、積極的自由に危険要素が含まれることから消極的自由の意義を強調する。このバーリンの整理にしたがえば、ハイエクの唱える自由も、それを支持したフリードマンの言う自由も、いずれも消極的自由に属す。この消極的自由の旗印の下に新自由主義が生み出された、と言ってよい。

では、強制を排除した消極的自由に、ほんとうに危険性はなかったのか。この点が問われねばならない。もしも危険要素がそこに何もなかったのであれば、危機は起こりえなかったであろう。そもそも強制の全くない人間社会などはありえないのではないか。一個人の自由が、他者の自由を奪う可能性は当然に考えられる。もしもそれが恣意的に行われるのであれば、それは何らかの強制力で排除される必要がある。総じて言えば、消極的自由論は、人間は本来的に自由であるとする先験的自由論に帰着する。それによって、果してT.ホッブスの提起した「万人の万人に対する闘争」を免れることができるのか。(ホッブス[8])このことこそが問われるべきであろう。実際にバーリンも指摘するように、強者の自由は弱者の死を意味する。他方で、積極的自由論も、もちろん個人の自由意志の一方的賛歌で終ってはならない。哲学体系の基底に自由論を措定し、自己実現の必然性として積極的自由の意義を高らかに宣言した偉大な哲学者F.W.ヘーゲルも、その点に歯止めをかけることを忘れなかつた。(ヘーゲル[6])彼は、私利私欲のみを追求することを暴力的自然感情と称し、それを厳しく指弾した。さらに、ハイエクやバーリンが忌み嫌った強制を、ナチズムの迫害により直に体験した哲学者のH.アレントが、その苦しみを受けたからこそ、逆に強制に抗するために自己の精神的自由を自ら決定できることの尊さを強く訴えた点も忘れるべきではない。(アレント[1])ここで我々がぜひとも再考しなければならないことは、むしろこれまで、経済的にも政治的にも、まるで正当性を誇示するかのようにまかり通ってきた消極的自由に含まれる問題点ではないか。20世紀の初頭にすでに漱石が見抜いていた(「草枕」)世の中の澆季溷濁(ぎょうきこんだく)さは、今日、その度合を極めつつある。その根因に、消極的自由の名の下で遂行された強者の自由による暴挙があったとすれば、我々はそれを断じて許してはならないであろう。

(参考文献)

[1]H.アレント著、志水速雄訳『人間の条件』中央公論社、1973年[開架2階 114/0/20]
[2]F.A.ハイエク著、気賀健三、古賀勝次郎訳『自由の価値』(西山千明ほか監修『ハイエク全集5 自由の条件1』)春秋社、1986年[開架3階 331/72H49/1-5]
[3]D.ハーヴェイ著、渡辺治監訳『新自由主義：その歴史的展開と現在』作品社、2007年[開架3階 332/0/196]
[4]I.バーリン著、小川・小池・福田・生松共訳『自由論』、みすず書房、1997年[開架3階 309/1/2-2]
[5]M.フリードマン著、村井章子訳『資本主義と自由』日経BP社、2008年[開架3階 332/06/118]
[6]F.W.ヘーゲル著、長谷川宏訳『歴史哲学講義』岩波書店、1994年[開架091/134/56-1～2]
[7]T.ホッブス著、水田洋訳『リヴァイアサン(一)』改訳版、岩波書店、1992[開架2階 091/133/5-1-2]

研究ノートから

Siebold『NIPPON』(注)

国際文化学部 国際文化学科 教授　宮崎 克則

シーボルト(1796-1866 在日期間1823-1829)

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、1796年にドイツのヴュルツブルグで誕生した。彼は、文政6年（1823）、長崎の出島にあったオランダ商館の医者として来日し、翌年には長崎郊外の鳴滝に塾を設け、実地診療のかたわら高野長英ら数十名の門下生に医学・博物学などを教えた。彼は、日本とその周辺地域の調査・研究を行い、帰国後に『NIPPON』を出版する。『NIPPON』には当時の日本国内でも重要機密として公表されていなかった伊能忠敬の調査に基づく日本地図などが紹介され、また農村や都市の風景・風習、さらには日本の武器や軍事訓練の様子などが詳細に絵画として描かれている。

九州大学附属図書館医学図書館

医学図書館の3Fにある展示室に、大正15年に医学部法医学教室が購入した『NIPPON』の一冊が展示されていた。それには10枚程の図版があるだけであり、「もっとたくさん他にあるはず」と図書館職員の方に調査を依頼した結果、貴重書庫の奥から残りの図版が大量に見つかった。

未製本『NIPPON』の希少性

『NIPPON』に収録された図版は、総数367枚であるが、医学図書館に残る分は4枚ほどが所在不明となっている。『NIPPON』は、1832年から1851年の20年にわたり、13回に分けてオランダのライデンで印刷され配本された（発行部数は200部ほど）。当時の出版のあり方は、製本されて出されるのでなく、分冊で出され、後に購入者がそれを製本所に持ち込み、自分が気に入った表紙を付けて製本するものであった。医学分館の『NIPPON』は製本されておらず、出版当時の様子をそのままに伝えている希少本である。これをもとに『NIPPON』がどのように作成され、配本されたのかを明らかにすることができるし、開国前の日本をヨーロッパの人々がいかにイメージしていたかを検証することも可能である。

図版　面をかぶった踊り手

(注)このコーナーで紹介した『NIPPON』は九州大学総合研究博物館　デジタルアーカイブにて公開されています。http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/nippon%20neo/

ブラウジングルーム

鉄道会社の歴史を辿る

商学部 商学科 准教授　福田 晴仁

ビスタ・カーが紹介されているページ

私は生まれて物心ついてから鉄道が好きで、それが災いして？交通論を勉強するようになり、本学では「ロジスティクス論」「交通論」の専門科目を担当させていただいております。レベルは低いですが、論文も鋭意執筆しておりますので、図書館の閉架書庫にもよく潜伏？しております。本学には2008年4月に赴任しまして、福岡在住がやっと3年目に入ったところです。それまで30年以上大阪に住んでいましたので、関西の鉄道に関する文献には少なからず関心があります(これからは、九州の鉄道にも関心を持とうと思っています)。

その閉架書庫で、素晴らしい文献に出会いました。「50年のあゆみ／近畿日本鉄道株式会社[編](注)」という、近畿日本鉄道(近鉄)の社史です。近鉄は日本最大の路線距離を誇る私鉄で、大阪の難波から名古屋まで、特急列車を頻繁運転してJR東海の新幹線に対抗しています。「50年のあゆみ」は今から50年前の1960年に発行されたものですので、近鉄は100年の歴史をもつ鉄道会社ということになります。

関西には他にもいわゆる大手私鉄がありますが、なぜ近鉄かというと、私が近鉄沿線に住んでいた、という単純な理由とともに、この会社の沿革が非常に興味深いものだからです。近鉄は大阪と奈良を結ぶ路線(現在の奈良線)を敷設した大阪電気軌道(大軌)として発足し、大阪府東部と奈良県内に路線網を拡大、さらには参宮急行電鉄(参急)という子会社を設立して三重県の伊勢市にまで路線を到達させます。その後、参急と近隣の鉄道会社を次々と吸収合併し、太平洋戦争開戦直前の1940年には1府4県(大阪、奈良、三重、岐阜、愛知)に路線網を有する関西急行鉄道という会社に成長しました。戦時中は国の指導によって南海鉄道(現在の南海電鉄)と合併して現在の社名である近鉄になり、終戦後南海電鉄が分離したものの、社名は変更せずに現在に至っています。なお現在は2府3県(大阪、京都、奈良、三重、愛知)に路線網を有しています。

「50年のあゆみ」は鉄道史の観点から貴重な資料ですが、それとともに現在の近鉄の躍進を支えた高性能車両についても詳しく掲載されており、鉄道技術史上も貴重な資料であるといえます。1950年代半ば頃、我が国の鉄道業界は高性能車両の開発を推進していましたが、「50年のあゆみ」には、近鉄が開発した高性能車両について、開発に至る経緯、各車両の諸元が掲載されております。関西出身の30歳代以上の人には「近鉄特急＝2階建て」のイメージが強いと思いますが、この2階建て車両(ビスタ・カー)が登場したのは、まさに1950年代後半なのです。

「50年のあゆみ」は、鉄道史、鉄道技術史の観点からも非常に興味深いものであり、また今日「私鉄王国」と呼ばれるまでになった、我が国の鉄道経営史の一端にも触れることができる1冊です。ぜひご一読をお勧めします。

(注)近畿日本鉄道株式会社編『50年のあゆみ』近畿日本鉄道、1960年[閉架3 335/48/137

世界の図書館

［イタリア半島編］

トリノ大学国立図書館

University of Torino Library : piazza Carlo Alberto, 3 10123 Torino
http://www.bnto.librari.beniculturali.it/

法学部 法律学科 教授　神宮 典夫

トリノ大学国立図書館（Biblioteca Nazionale Universitaria di Torino）は、王宮広場（Piazza Castello）、エジプト美術館（Museo Egizio：古代エジプトの所蔵品については、カイロ美術館に次ぐ規模を誇る美術館）、旧国会議事堂（イタリア統一時の最初の議事堂）などのある一角に位置し、トリノのバロック調の建築群にふさわしい重厚な建物である。

現在の図書館の原型は、1732年、当時のサヴォイア家の君主、ヴィットリオ・エマヌエレ・アメデオの指示に基づき、王立図書館を基礎にして、その蔵書や王室所蔵の図書、君主個人の蔵書、さらには、トリノ市各地に点在する文庫、個人の蔵書などを収集して、研究者や学生の利用のためにつくられた。王立図書館は、蔵書の収集と同時に、王立印刷所で蔵書の目録作成を開始し、特に、数多く収集された貴重な手稿の目録作成が入念に行われた。当時、まだ分裂国家であったイタリアは、19世紀後半に入ると統一運動（リソルジメント）が激化し、1861年に至り、ヴィットリオ・エマヌエレ二世がイタリア王を宣言し、その後、政治的のみならず、文化的にも、イタリア統一の動きが加速された。こうした統一運動の中で、1876年の勅令により、イタリア全土の図書館も再編成されるに至り、王立図書館は、王室から独立した近代的図書館として装いを新たにし、名称も、現在のトリノ大学国立図書館（Biblioteca Nazionale Universitaria di Torino）となった。1904年、トリノ大学国立図書館は大火災に見舞われている。このとき、古い手稿やインキュナブラ（印刷技術がやっと途に就いた15世紀後半の初期刊行本）を所蔵していた部屋が焼け、多くの貴重本が焼失した。20世紀に入ってからは、貴重本の収集が大規模に行われた。第二次世界大戦において、特に、1942年12月8日、トリノは大空襲を受け、この時、図書館も被災したが、蔵書の収集はその中でも続けられた。戦後、図書館の再建が計画され、現在の図書館は、1973年に完成している。

［一般閲覧室］

［大プリニウス（C.Plinius Secundus）「自然史」手稿（AD15-16C.）］

トリノ大学国立図書館には、多様なかつ貴重な多くの図書が所蔵されている。インキュナブラの所蔵は1600点で、その数はイタリアの図書館でも有数である。私たちのよく知るものとしては、古代ローマの政治家で弁論家のキケローの「義務論（De officiis）」やその他の作品、東ローマ皇帝ユースティーニアーヌスが編纂させた法学入門（Institutiones：アックルシウスの注釈つき）、アリストテレースの著作、他に多くのキリスト教作家の著作などが所蔵されている。貴重な絵画、版画、エッチングも所蔵されている。たとえば、デューラー、ブリューゲル、カラッチ、クラナッハ、ピラネージなどの作品である。手稿の多くは旧サヴォイア王家の所蔵品である。手稿に書かれている言語は、ヘブライ語、アラビア語、ペルシャ語、トルコ語、ラテン語、ギリシャ語、フランス語、スペイン語など、多様である。火災や戦災に会う前は、ヘブライ語の手稿数は、ヨーロッパ最大であったと言われている。アラビア語の手稿では、14世紀に書かれた多数の医学書があり、これらは、15世紀にラテン語に翻訳され、これもトリノ大学国立図書館が所蔵している。ラテン語のものでは、13世紀の聖書の手稿、15-16世紀の手稿である、古代ローマの政治家で文人であった大プリニウスの「自然史」が所蔵されている。音楽関係の所蔵品も数多い。ヴィヴァルディやグリュック、ハイドンなど著名な作曲家の手稿や初期に印刷された刊本などである。修道院が所蔵していた中世のミサ典書なども収集されている。こうした貴重な蔵書は、ほとんど、公開されており、図書館職員が立ち会えば、筆写することが可能である。

トリノ大学国立図書館は、大学図書館であるのみならず、一般に公開されている図書館でもある。トリノ市民やイタリア人に限らず、外国人でも自由に利用できる極めて開放的な図書館である。私もトリノへ行けばよく利用している。私が最初に訪れたのは、第一次イラク戦争がはじまるころで、大学では、学生や若手の研究者を中心に、反戦運動が組織され、大学本部や各学部の図書館、研究室はほとんど封鎖されていた。ただ、点在する大学の建物が封鎖されていたにも関わらず、トリノ大学国立図書館だけは、開放されていた。「大学」図書館（Biblioteca universitaria）という名称は付いているものの、この図書館は、大学人のみならず、すべての人に、いつでも開かれている（あるいは開かれるべき）総合図書館だからなのだろうかと、その時、感じたことを覚えている。

開館の曜日は、月曜日から土曜日まで、開館時間は、月曜日-金曜日が8:00-19:00、土曜日が8:00-14:00。8月は休館。

（写真提供：トリノ大学国立図書館）

［トリノ大学国立図書館正面］

［バチカン宮殿：Ⓐバチカン図書館 Ⓑバチカン博物館 Ⓒシスティーナ礼拝堂］

ローマ法王庁バチカン図書館

Vatican Library:Biblioteca Apostolica Vaticana, Viale Vaticano, 97, 00193 Roma
http://bav.vatican.va/

国際文化学部 国際文化学科 准教授 山田 順

歴史の都ローマほど「図書館密度」の高い都市はない。イタリアの国立図書館はもとより、フランスやドイツ、イギリス、アメリカ、スペインなどが競って建てた歴史・考古学・芸術アカデミーの併設図書館、ローマ大学やカトリック系大学の図書館、そして種々の専門分野に特化された研究所（聖書学研究所、考古学研究所etc.）付属図書館、さらには、何百年も続く修道院の図書室などなど、大小様々で多様な図書館がローマ歴史地区とその周辺部に密集しているのだ。そして、その多くが、ルネサンスやバロックの歴史的建築物の中に存在するのだから、利用者にはたまらない。たとえば、フランス・アカデミー付属図書館は、その設計にミケランジェロも関わったとされる「ファルネーゼ宮殿」（1510年建設）の三階全フロアーを利用しており、繊細なフレスコ画で飾られた優美な回廊が、そのまま閲覧室として使用されている。筆者が留学していた十数年前、ローマに学ぶ世界中から集まる学生たちは、皆一様に7～8枚の図書館カードをまるでトランプのように持ち歩き、研究のための文献を探し求めながら、同時に、「歴史的図書館めぐり」という最高に贅沢な楽しみを享受していた。このような都市ローマに存在する博物館のような図書館群のなかで、その規模と歴史的重要性という意味において超A（エース）級図書館と言えば、誰が何と言おうとも、バチカン図書館（Biblioteca Apostolica Vaticana）に間違いない。

［図書館内部・閲覧室］

［図書館内部・フレスコ画］

1448年、教皇ニコラウス5世の時代に整備され、続いて1587年、ルネサンス建築の巨匠ドメニコ・フォンターナによって新たに建設されたバチカン図書館は、あのバチカン博物館と棟続きで、さらに、ミケランジェロによる天井画や祭壇画（「最後の審判」1541年）で有名なシスティーナ礼拝堂から僅か数十メートルの場所に位置している。現在110万冊以上を数える蔵書には、稀少なインキュナブラ（初期活字印刷本）や、ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語をはじめとする豊富な写本コレクションが含まれている。なかでも、『バチカン写本』（ Codex Vaticanus ）は、4世紀起源の旧約・新約聖書ギリシア語写本で、シナイ写本、アレクサンドリア写本と並ぶ現存する三大ギリシア語写本のひとつとして知られている。その他、ユニークなところでは、古代ローマ時代のものを含む貨幣コレクションが、本と同じく貴重な歴史的文字史料として数多く所蔵されており、この図書館の歴史博物館としての性格を色濃く示している。

バチカン図書館は、建物の老朽化を理由に2007年から修復・補強工事のための閉館を余儀なくされていたが、今年9月、「核爆弾にも耐えうる書庫を装備」（報道各紙）して新たに開館した。先の『バチカン写本』も、その書庫に大切に収蔵されているらしい。また、今回の閉館期間中に、NASAの最新技術を利用して図書館所蔵の貴重な文書数千点のデジタル化プロジェクトが開始されたことを、ローマ法王庁が明らかにしている。書物という人類の貴重な文化遺産を、確実に後世に伝えるための図書館としてその存在価値は大きいが、願わくば「核爆弾に耐えうる」必要などなく、むしろ人類の「平和のシンボル」であり続けてほしい。なお、バチカン図書館を利用するためには、当然ながら、毎回、イタリア領ローマからバチカン市国への出入国手続きが必要だ。初回に、パスポート持参で図書館利用カードを作ると二回目からは手続きが簡略化されるものの、毎回、厳重な警備チェックを受けるのはやや気が滅入る。しかし、これもまた、「世界遺産」のなかの図書館に身をおくための「入館儀式」と捉えれば、さほど苦にはならないものだ。

（写真提供：上右：著者撮影、文中：ロイター／アフロ）

使ってみようシリーズ 13

図書情報課 小副川 明子

今回は図書館チューターの皆さんに撮影のご協力をしていただきました。ありがとうございます。

ひと息入れてみよう！

みなさんは、図書館での勉強中に疲れを感じたとき、どうしていますか？今回は、図書館の中で「ひと息入れたい」時にお勧めのコーナーをご紹介します。"図書館は勉強をするところ"という固定観念を取り去り、自分なりのリラックス法を見つけて活用してください。きっと楽しいひと時が過ごせます！

①視聴覚

視聴覚コーナーでは、図書館に所蔵している映像資料（DVD、ビデオテープ、レーザーディスクなど）や音声資料（CDなど）を視聴することができます。自己所有のものを持参して視聴することもできます。ペア席もあります。利用希望の際は、カウンターに常備されている申請書に記入して、学生証と一緒に提出してください。

②CNN

CNNコーナーでは、図書館の開館時間中ずっとCNN放送を流しています。CNN放送とは、世界中のニュースを報道しているアメリカのテレビ番組です。もちろん使われている言語は英語ですので、英語のヒアリング力を鍛えたい人は、ぜひ利用してください。天気予報やスポーツニュースなど、比較的聞き取りやすいものもあります。番組表はテレビの横に置いています。利用申込みは不要で、席が空いていればいつでも使えます。1人用ソファに座り、ヘッドホンから流れる音声と外国のニュース映像で、世界のニュースをチェックしましょう。

③雑誌

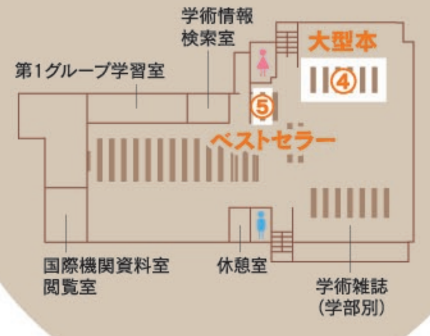
本屋でよく見かけるものからちょっとマニアックなものまで、約100冊の雑誌をそろえています。雑誌をただ読むだけでなく、友だちとの待ち合わせ、ちょっと休みたいときに利用できる人気のコーナーです。ゆったりとしたソファでくつろげます。

雑誌は、「ただ楽しむために読む」という以外に、「今の世の中でどんなことが話題になっているのか、人気を集めているのか、それが自分とどう関係があるのか」について考えることにも役立つ情報源です。ネットでは得られない情報も満載です、お見逃しなく。

雑誌コーナーの人気もの

「シティ情報ふくおか」「福岡Walker」「with」「MORE」「MEN'S NON-NO」「AERA」「Cut」「BRUTUS」「Casa BRUTUS」「ナショナルジオグラフィック日本語版」「Number」「WHAT's IN?」「キネマ旬報」「るるぶ」

2F



④大型本

地図や美術書など、サイズが大きくて一般の棚に入りきれない本、約2,300冊を並べています。パリの街角写真集(①)、全国のお城の写真と解説(②)、ディズニーのアニメやテーマパークを紹介している本(③)など、目で見て楽しめる本が多くあります。もちろん、ピカソ、ゴーギャン、北斎など、有名画家の画集もそろっています。美術館や博物館に行くのが好きな人、地図や歴史、美術、デザインに興味がある人は、ぜひ一度、大型本コーナーの本を手に取ってみてください。

① photographs by Attilio Bocazzi-Varotto ; sketches by Luisa Romussi; Paris 360° Random House, 1999[293/508/5]
② 平井聖監修『図説日本城郭大事典』日本図書センター、2000年[521/82/4-1～3]
③ Christopher Finch, Peter Blake;The art of Walt Disney H. N. Abrams ,1973[778/253/17]
配架場所は全て[大型本(開架2階)]

⑤ベストセラー

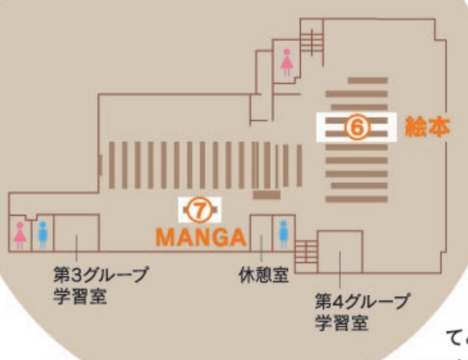
書店の売上ランキング、公共図書館の貸出ランキング、書評、利用者からの購入希望等を参考にして選書しています。過去1年間(2009年8月～2010年7月)の貸出トップ5は次のとおりです。

貸出 TOP5

1. 東野圭吾著『ダイイング・アイ』光文社、2007年 [913/6H55/23]
2. 湊かなえ著『告白』双葉社、2008年 [913/6Mi39/1]
3. 伊坂幸太郎著『チルドレン』講談社、2004年 [913/6I68/5]
4. 東野圭吾著『聖女の救済』文藝春秋、2008年 [913/6H55/26]
5. 東野圭吾著『ゲームの名は誘拐』光文社、2002年 [913/6H55/6]

配架場所は全て[ベストセラー(開架2階)]

4F



⑥絵本

図書館では約2,000冊の絵本を所蔵しています。人間科学部や教職課程を履修中のみなさんは課題で利用することも多いと思いますが、絵本の棚の前を歩いていると、所属学部を問わず誰もが懐かしい気持ちになり、いつの間にか時間がたってしまいます。勉強の合間のちょっとした息抜きに、小さな頃に読んだ絵本を探してみてください。大人になってから読む絵本には新しい発見があるかもしれません。

⑦MANGA

世界に広がるMANGA文化を、みなさんも体験してみてください。図書館では日本の漫画を英訳(仏訳)したものを所蔵しています。英語力を鍛えるために読む、英語力を試すために読む、英語を勉強するために読む、なんとなく読む。MANGAの活用法は多岐にわたります。所蔵の多くはみなさんにも世界にもよく知られたタイトルですので、手に取りやすいと思います。日本とは違った擬音語の表現や意訳を楽しんでみてください。

MANGAコーナーのオススメ

Nana [開架4階 726/1/112-1～18]
Dragon ball [開架4階 726/1/182-1～16]
Naruto [開架4階 726/1/179-1～47]
One piece [開架4階 726/1/181-1～23]

文学部 英文学科 教授 古屋 靖二

『シェイクスピア新発見:生前の肖像画』

Mark Broch and Paul Edmondson, *Shakespeare found : a life portrait*
Jarrold Publishing, 2009 [開架4階 930/28Sh12/541]

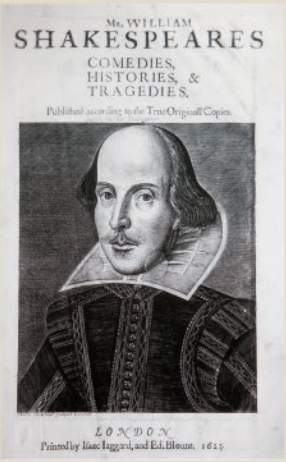


写真1:銅版画
『第1・二つ折本全集』
巻頭の扉絵(1623)

写真2:胸像
ホーリー・トリニティ教会
内設置(1623)

写真3:チャンドス・ポートレイト
(1610以後)

イギリス・ルネッサンスが生んだ偉大な劇作家・詩人ウィリアム・シェイクスピア(1564-1616)は、生涯の文書記録は残念ながら少ない。だがかつて話題となった彼の別人説(フランシス・ベーコン等)に代わって、今では彼の実在説に疑念を挟む余地はない。一方生前の彼の肖像画については、数世紀にわたって、特に18世紀以降探索の試みがなされ、多数の肖像画の信憑性が検討されてきた。その状況の中で、昨年3月衝撃的な新聞報道が日本でもなされた。シェイクスピアの生前に描かれた正統な肖像画が発見されたというのだ。ここに紹介する文献は、その歴史的発見・決定にまつわる経緯を紹介する興味深いガイドブックである。現代シェイクスピア研究の権威スタンリー・ウェルズ教授のお墨付きの序文も付く。

ところでシェイクスピアの死後、記憶などを基に制作された権威ある肖像画・胸像が二つある。一つはシェイクスピアの死後1623年に出版された「第1・二つ折本全集」の巻頭の扉を飾っている銅版画(写真1)、もう一つは彼の生誕地ストラットフォード・アポン・エイボンのホーリー・トリニティ教会内に死後1623年に据え付けられた埋葬記念の胸像(写真2)。前者はマーティン・ドロウトハウス(1601-50?)が制作。文学史やシェイクスピア入門書などにしばしば掲載され、本学図書館4階のExtensive Readings棚前の柱にも掲示されている。ひだ襟をつけ、額が非常に広く目鼻立ちのはっきりした顔貌は広く流布していて、イラストにしやすい特徴がある。後者はシェイクスピアの友人でロンドンの墓石屋ヘラルト・ヤンセンが制作。広い額は全集の扉画と同じだが、両手に紙とガチョウペンを持ち、口髭とあごひげを蓄えてふくよかである。さらにもう一つ「チャンドス・ポートレイト」(ロンドンのナショナル・ポートレイト・ギャラリー所蔵)が挙げられる(写真3)。これは上記二つと異なり生前の肖像画だが、ジョン・テイラー(1651死)によるもので、油彩による肉感性と芸術性によって他の画とは異質の魅力に富み、信憑性も高い。

このような状況の中で、昨春写実性を帯びた油彩のシェイクスピア肖像画が発見・展示されたのである(表紙写真)。しかもそれは生前の1610年、彼が46歳の時に描かれ、画家は不明。この画の所有者で絵画修復家アレックス・コッブ氏が2006年ロンドンのナショナル・ポートレイト・ギャラリーで開催されていた「シェイクスピアを捜して」と題する展覧会を訪れ、そこで展示中のシェイクスピアの画と自分の家に代々伝わっていた肖像画との類似性に気づいたことが今度の発見の発端となった。彼の苗字をとって「コッブ・ポートレイト」と名づけられ、「注意深い調査と注目すべき伝記的証拠の検証によって、これがシェイクスピアの本物の、もっともよく似た肖像であることが確認された。」(p.6)この貴重な画はシェイクスピアの保護者の1人、若きサザンプトン伯爵の肖像画とともに、伯爵の遠縁にあたるコッブ家によって3世紀以上にわたって保存されてきた。「生き生きとした目つき、かすかな笑み、知性のきらめき」(p.10)を湛えた写実的な顔貌は、上述の白黒の銅版画と比べて人間的で、また高貴な品格を醸し出している。

またつい最近の調査によって、この肖像画にまつわる意外な事実までこの文献は掘り出している。この貴重な肖像画はいくつかの画の複写のために原画として当時使用されていたことが判明。前述の展覧会でコッブ氏の目に留まった肖像画も、その類似性からこの「コッブ・ポートレイト」を下敷きにして描かれたことが証明された。それだけ今回の発見の重要性が浮き彫りになった。これらの経緯もこの紹介文献は語ってくれて興味が尽きない。

参考文献(表紙写真)
Edited by Stanley Wells , *Shakespeare found! : a life portrait at last : portraits, poet , patron , poems* ,Stratford-upon-Avon: The Cobbe foundation and the Shakespeare Birthplace Trust , 2009.[開架4階 930/28Sh12/542]

西南学院大学図書館報 No.169 2010(平成22)年10月29日発行 編集 図書館報編集委員会 発行 西南学院大学図書館
〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号 TEL(092)823-3426 http://www.seinan-gu.ac.jp/library/